慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『和気藹藹』
Sub Title	
Author	帯盛, 迪彦(Obimori, Michihiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.502- 505
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0502

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

せ位の役には立つし、お国の為に死場所を与えてやろうってところでしょうか。ですから軍隊に入ってからも、隊長は頭から私を脆弱な人間ときめつけていましてね、まあそれが逆に幸いして、私がもたもたしていても、まあ丙種だから仕方ねえ、と思ったんでしょうか、余りやられなかった。ところが、同じ隊の中で駆けっこをして私より遅かったりする兵隊がいると、『お前は村松にさえ負けるのか。』と怒鳴られて、そいつが、ひっぱたかれるわけです。実は、私は昔からご覧のような痩身ですから、身が軽いというか、駆けっこは速いというのではないけど、これだけは結構人並みなんです。他のことはからっきし駄目ですがね。そこで私が一所懸命走ると、二、三人は私より遅いのが出て来るんですよ。その度に、『村松よりも、』といってぶんなぐられるのでね、見ていて段々それが辛くなって来ましてね。それからは、いつも加減して走って、わざとびりになってましたね。」

人と差をつけようなどと焦っていた頃、先生から聞いた話だ。私が師として接した幾人かの人の中で、こんな形で時々私の心に黄信号を点して下さったのは先生しかいない。そのことに改めて感謝したい。

蛇足を一つ加えれば、明治この方、日本の教育は「甲種合格」を作ることだけに熱中して来た。そうして生み出された「甲種合格」達がこの国を動かして来た。「甲種合格」はもう沢山だ。

（慶應高校教諭・昭和三十一年卒）

『和気藹藹』

帶盛迪彦（オビモリミチヒコ）

私が、塾の中国文学科に在籍したのは、一九五三年の四月から一九五六年三月までの間で、今から三十年以上前のことである。

あの「眠り狂四郎」シリーズで著名な、我等が中文の先輩、柴田錬三郎氏（本名斉藤錬三郎、一九四〇年三月卒業）が「イエスの裔」で、第二六回直木賞を授賞されたのは、一九五二年二月。私が塾の大学試験を受けている最中の出来事であった。

日吉での一年間の教養課程を経て専門課程へ進む時、私は、躊躇なく、奥野信太郎先生が主任教授であった、中国文学科を選んだ。

浅草生れで、塾の先輩でもある私の父の影響で、中学生のころから奥野先生の著作に親しんで来た私は、三田の古ぼけた教室で、始めて先生にお会いした時の感激は大変なものであった。

先生は、決して崩されることのない、あの独特の、丁重な語り口で、私達若僧を一人前の大人として扱って下さった。

それから三年、お世辞にも良い学生とは云えなかった私だが、奥野先生の時間だけはサボることなくほぼ皆勤した。

授業の楽しさもさることながら、放課後の課外授業も、もっと楽しいものであったから。

課外授業――それは田町の駅裏の小さな、しかし美人の三姉妹の居るバーであったり、新橋や渋谷のヤキトリ屋の屋台であったりしたが、そこでの先生の巧みな話術での博識の開陳は、文句なく素晴しいものであった。

この課外授業で得た学問は、その後の私の生き方、そして、今の私に限りない影響を与えてくれた。

放課後以外でもあの頃は（今でもそうかも知れないが）よく教師と生徒の会合が持たれた。春の深大寺、秋の鎌倉。そして、帰途は必ず酒席になった。

当時、勿論まだ若かった、藤田、村松両氏も先輩として同席された。

酒好きの私には、この上ないことであったが、お酒の弱い両氏は、すぐ赤くなられて、私達の酔態をニコニコと見守られていた。

ある飲み屋で、酔余の一興で、奥野先生が特異芸のお化けを演じられた時、よせばいいのに私は、ウロ憶えのお経を伴奏として唱えた。本職のお坊さんである藤田さんの目の前で――。藤田さん、ゴメンナサイ。若僧の悪酔いでした。

その様な中文科の集いの藤田さんの傍に、夫人の姿が寄りそうようになったのは、何時ごろからのことだったか。

奥野先生が一九六八年に急逝され、村松、藤田両氏が後を継がれた。

あれは今から十年余り昔。

私が、ショー・ブラザースの招聘で映画を撮るため、半年程、香港に滞在した時、たまたま交換教授として、村松さん御夫妻が香港に居られて、異境での出合いになった。

正統北京官話を得意とされる村松さんは、あの開放的な広東語は少々不得手で、あまり街を出歩かれないとおっしゃる。

私は、撮影所で憶えた、あやしげな広東語をあやつり、村松さんのお供をして街にくり出し、何度か御馳走になり、楽しい夜を過した。

香港での仕事を終え、私達夫婦は、東南アジアに小旅行を計画した。ショー・ブラザースのギャラは東京振り込みになっていたので、手元が少々心細い。私は、あつかましくも、村松さんに借金を申し出、お陰で旅行を無事終えることが出来た。

村松さん、有難うございました。

× × ×

あの飲み屋での酔狂が、香港での夜景を見ながらの散策が、つい昨日のことのようよ思われるのに、村松さん、藤田さん、両氏が、もう定年退職だという。

何と、月日の経つのの早いことか。

両氏が去られた後の中国文学科が、教える側と教わる側の、和気藹藹の良き伝統を、いつまでも受け継ぎ、益々

楽しく、有意義な学問の場であることを願っています。
藤田さん、村松さん、お疲れさまでした。
益々お元気で!!

（映画監督・昭和三十一年卒）

「劣等生からの謝辞」

栗原玲児

村松、藤田両先生がご退任、とうかがって、自分の中にあった中国文学科への親愛感、と言ったような気持ちが、はたり、と断ち切られるような感慨を味っています。とは言え、これまで年賀のご挨拶すら、ろくに差し上げていない礼を知らぬ生徒ですから、身勝手な感傷には違いありませんが、まるで自分の出自が失われてしまうような、中文が遠い無縁の存在になってしまうような淋しさなのです。私が、出来の悪い、名ばかり中文に籍を置いた学生だったから余計そう思うのかも知れません。もっとまともに学問をした学生ならば、両先生への愛惜の念も、その学問上のご業蹟への尊敬も、適確な言葉で表現できるでしょう。しかし、私には、両先生の優しい誠実なご人格が懐かしく思い出されるばかりです。

お二方とも、まことに温和なお人柄でありました。それを良いことに、我々学生どもは至極だらしなく講義を聞いていたものです。当時の中文は、人数が少いせいもあって、和気藹々というと聞こえがいいけれど、些かの緊張もなく、不遜にも煙草など吹かしながら授業を受けていたのです。

ところがお二方とも、学生どもの無礼を咎めるでもなく、常に微笑を絶やされることなく講義を続けられました。両先生が大きな声をお出しになったのを聞いたことがありません。

もとより出来の悪い生徒ですから、常に辛うじて落第を免れる、と言ったていたらくでしたが、こう申しては